

町のストーリーはこれから

# 900号

## 記念特集 広報もがみ



発行されてきた1号1号の積み重ねによって築かれてきました。広報紙のページをめくることは、町の歴史をたどることもあります。これから先も広報もがみは、町の出来事を伝えながら、次の時代へと続くストーリーを記録し続けていきます。

ページをめくれば、  
町の歴史

広報もがみを振り返ってみると、そこには町のさまざまな出来事が記録されています。町の行政の動きはもちろん、地域の祭りや学校の話、産業の取り組み、地域で活躍する人々の姿など、当時の町の様子が紙面に残されています。

広報紙は、その時代に生きた人々の暮らしや地域の空気まで伝える、いわば「町のアルバム」のような存在ともいえるでしょう。

平成5年に発行された第500号の記念特集では、これまでの広報紙を振り返りながら、広報もがみが町の出来事を記録し続けてきた媒体であることが紹介されていました。広報紙を読み返すことで、その当時の社会の動きや町の課題、町民の暮らしの様子などを知ることができ、広報もがみは単なるお知らせの紙面ではなく、「町の歴史を刻む記録」であると位置づけられています。

それからさらに33年の時が流れました。町を取り巻く環境も大きく変化し、情報の伝え方も多様になっていきます。こうした中広報もがみは、町の出来事を町民に伝える媒体として発行を重ねてきました。紙面にはその時代の町の姿が映し出され、記事や写真の一つ一つが町の歩みを語る記録として積み重ねられています。900号という節目は、これまで



500号記念企画として特集された当時の紙面。歴史を振り返るコーナーや、編集を担当した職員が当時の状況を回想する記事などが掲載され、合計14Pにわたり特集された。

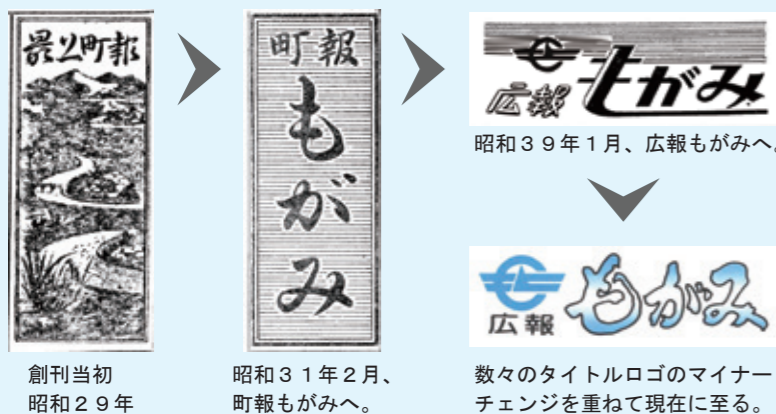
## 知ってた？ 広報もがみのヒミツ

### 「広報もがみ」という名前はいつ決まった？

「最上町報」から「町報もがみ」、そして「広報もがみ」へ。

昭和29年に発行された創刊号の名称は「最上町報」でした。「町報」という言葉には、町の出来事や行政の動きを町民へ知らせる“町からの報告”という意味が込められています。

当時の紙面を見ると、行政の情報や町の方針などが中心で、新しく誕生した町の動きを伝える役割が強かったことがわかります。



### みんなが見ている広報もがみ 実は発行日も変わっている！

創刊当初、昭和29年の最上町報は毎月1日発行でした。その後、昭和31年7月から毎月15日発行。昭和55年11月からは毎月20日。そして、平成19年9月から現在の毎月第4週木曜日となりました。

### 「広報」という言葉の意味

昭和39年1月、広報紙の名称は「広報もがみ」となりました。「広報」という言葉は、単に知らせるだけでなく、広く情報を伝えることを意味します。町の取り組みだけでなく、地域の行事や学校の話、町民の活動など、地域のさまざまな出来事を紹介する紙面へと変化。その後、時代と共に特集なども増えていきました。

### 創刊！ はじまりはここから

昭和29年9月、町村合併によって最上町が誕生しました。そしてその1か月後、新しい町の情報を町民に伝えるために発行されたのが「最上町報」です。これが現在の「広報もがみ」の始まりでした。創刊号の紙面は活字が中心で、写真もわずかしかありません。

しかし、その紙面には町の発足に際して町長のあいさつや、当時の町の状態、町民への呼びかけなどが掲載され、新しく生まれた町の第一歩が記録されています。

昭和29年に創刊した広報もがみ



昭和29年に創刊した広報もがみ

# 「この人を訪ねて」



## この人 を訪ねて

「この人を訪ねて」は、地域で活躍する人に光を当てた人物紹介のコーナーでした。当時の広報紙は行政のお知らせや行事の報告が中心でしたが、この企画では町で頑張る人そのものにスポットを当てました。農業に励む人、商店を支える人、地域活動が続ける人など、さまざまな人物が紙面に登場します。記事では仕事への思いや日々の取り組みが語られ、町で生きる人の姿が伝えられました。町の人を主役にしたこの企画は、当時の広報紙の中でも印象に残る読み物として紙面を彩りました。

ハンドルにぎって五十二年  
万騎の原 二戸伝八さん

明治三十三年十月二十七日生まれ、七十四歳を迎えるこの人二戸伝八さん。大正十二年、普通自動車免許証をうけてから、あしかけ五十二年間、  
「安全運転の秘訣は？」  
「そう、やっぱり無謀運転は絶対しないという事だなあ」という。  
「昔は今みたいにスピードの出る車もなかったし、今の若者の運転をみてみると、末恐ろしくなるよ」となげく。

現在、プロパンガス販売と旅館経営を両立させ、今日もこれからプロパン配達に行くというとても七十四歳の人とは思えない程、運転もしっかりしており本当に恐ろしい。  
「四十七号線もすい分車が増えて、大型車が多くなったが、長距離を走る運転者にあうと、いつもクラクションを鳴らして、事故を起こすなよ」と祈るという。  
「スピードはアクセルを踏みさえすれば、誰れにも出せる。やはり、マイペースを守って運転してほしい」と教えてくれた。

# 主役は町民！地域で輝く人を訪ねて

「この人を訪ねて」は、地域で活躍する人に光を当てた人物紹介のコーナーでした。当時の広報紙は行政のお知らせや行事の報告が中心でしたが、この企画では町で頑張る人そのものにスポットを当てました。農業に励む人、商店を支える人、地域活動が続ける人など、さまざまな人物が紙面に登場します。記事では仕事への思いや日々の取り組みが語られ、町で生きる人の姿が伝えられました。町の人を主役にしたこの企画は、当時の広報紙の中でも印象に残る読み物として紙面を彩りました。

平成31年4月～

# 「この人にフォーカス」



# 時代を越えて 人を伝える

平成31年4月には「この人にフォーカス」という新しい人物紹介企画が始まりました。当時、お知らせ記事が多いと町民の方々からご意見をいただき、「町民に焦点を当てた読み物を増やしたい」という思いから生まれた企画でした。  
実はこの企画は、「昔こんなコーナーがあったよね」という声から着想を得てスタートと言われています。「この人を訪ねて」と「この人にフォーカス」は内容こそ似ていますが、どちらもその時代に生まれたオリジナル企画です。平成の企画では延べ11人の方が紙面に登場しました。当時の担当職員は「もっと町民の方を紹介できればと心残りです」と振り返ります。時代が変わっても、人にスポットライトが当たる記事を読みたいという思いは、きっと多くの読者に共通しているのかもしれない。



# 広報の歴史を彩った連載たち

## 広報もがみ名物コーナー図鑑



広報もがみには、時代ごとにさまざまなシリーズ企画が登場してきました。「ろばたの主張」「ろへん談話」「ふるさと談義」など、その時代の話や地域の出来事を伝えるコーナーは、多くの読者に親しまれてきました。

## とつぷりちゃんのふるさと日記



その後も「とつぷりちゃんのふるさと日記」や、最近では8年間続いた「キラリ最上の子どもたち」など、紙面には数多くの人気連載が登場しました。あなたはいくつ覚えていますか？広報もがみの紙面には、まだまだ懐かしいコーナーが眠っています。



# あの時代のあのコーナー 覚えていますか？

# 帰ってきた！？広報もがみの名物コーナー



広報もがみの紙面には、時代ごとにさまざまな企画や連載コーナーが掲載されてきました。町で活躍する人物を紹介する企画や、若い世代にスポットを当てた企画など、その時代の町の様子や関心を反映した紙面づくりが続けられてきました。広報紙を振り返ると、懐かしいコーナーが数多く見つかります。

中には、長い年月を経て形を変えながら再び登場した企画もあります。ここでは、広報もがみの紙面を彩ってきた連載コーナーの中から、リバイバルを果たした名物コーナーなどを紹介していきます。

## 広報紙に生まれた人物紹介コーナー

昭和49年10月号から始まった「最上の若い人」は、町で暮らす若い世代を紹介する大人気のコーナーでした。当時の広報紙は行政のお知らせや行事の報告が中心で、町民の方々からは若者に関する記事が少ないと多数の意見が寄せられたそうです。

そんな中で登場したこのコーナーは、町の若者を主役にした少し新しい試みでした。コーナーには「五行紹介」と記載され、紹介文はおよそ5行ほどと短く、住所、勤務地、趣味、理想像、ひと言といった具合に簡潔に紹介されるシンプルな構成。それでも「この人知っている」「同級生が載っている」と、読者の間で話題になることがあり、広報紙を身近に感じさせる企画の一つとなりました。このコーナーは平成8年3月号まで続き、長年にわたり広報もがみの紙面を彩る人気企画となりました。

# 16年の時を経て再び登場

復活を果たした当時紙面



平成8年に終了した「最上の若い人」ですが、平成24年7月号で再び紙面に登場します。約16年ぶりの連載再開となった第1回では、当時の広報編集を担当していた職員が自ら紙面に登場し、「広報もがみをつくっています」という形で企画がスタートしました。広報紙を制作する立場の担当者が自ら出演することで、広報づくりへの思いや取り組みを読者に伝える試みでもあり、連載再開の意気込みが感じられる紙面となりました。

昭和の時代の「最上の若い人」は比較的短い紹介文が中心でしたが、リバイバル後の企画では人物紹介の内容も大きく変化しました。仕事への思いや地域との関わり、趣味や将来の目標などが詳しく紹介され、一人ひとりの人柄や活動がより伝わる構成となりました。平成27年3月まで掲載されたこの新しい「最上の若い人」では、町で活躍する若い世代が改めて紹介され、紙面には多くの人物が登場しました。広報紙を読み返してみると、こうした企画が時代を越えて受け継がれていることが分かります。

# あなたはこのコーナーに登場したことはありますか？ 最上の若い人



昭和期の紙面

過去に発行された広報もがみの名作をご紹介します

広報は町の出来事を伝えるだけでなく、その時代の課題や社会の変化を町民と共有し、ともに考える役割を持っています。広報もがみはこれまで、地域の出来事だけでなく社会問題や町の課題に向き合いながら紙面づくりを行ってきました。その中でも、特にご紹介したい紙面を昭和、平成前期と後期の3つの時代の中からご紹介します。

昭和 まちづくりを紙面で語った広報 昭和49年12月号



この号では「町づくりの焦点 社会教育施設をどういかに」と題した広報座談会が掲載されました。地域の有識者が社会教育施設の役割や地域づくりについて語り合う様子を、4ページにわたり紹介した大型企画です。

当時、社会教育施設は地域活動の拠点として期待されており、町民の交流や学びの場としてどのように活用していくべきかが大きなテーマとなっていました。紙面には、専門家や地域の代表者の意見を掲載しながら、町の将来について多角的に議論する内容をまとめています。

また、この号では冬期間の出稼ぎ問題にも焦点を当てています。家族と離れて働く父親に向けて、子どもたちがメッセージを送る見聞き企画などが掲載され、当時の地域社会の現実や家族の思いを伝える



平成9年11月号では、「地域で青少年を育む」と題した特集が掲載されました。当時、町では荒れた中学校や青少年を取り巻く問題が大きな地域課題となっていました。

この特集は、学校だけの問題ではなく、地域全体で子どもを支える必要があるという視点から企画されたものです。同紙ではこの問題に正面から向き合い、地域社会の課題として町民とともに考える紙面を掲載。特集は全8ページで構成され、交番所長へのインタビューから始まり、地域で起きている青少年問題の現状や、子どもたちを取り巻く環境について詳しく語られており、読者が問題の背景を理解できる内容となりました。続くページでは、町の有識者による座

談会を掲載。地域の大人たちが青少年問題をどのように受け止め、これからの地域社会の中でどのように子どもたちを支えていくべきかについて議論されました。そして、特集では問題を単に取り上げるだけでなく、「地域で子どもを育てる」という視点を大切にしていました。学校や家庭だけではなく、地域全体で子どもたちを見守ることの重要性を伝える内容となっており、多くの読者に強い印象を残しました。

後に、この発行号は山形県広報コンクールだけでなく、全国広報コンクールでも入選1席という優れた評価を受けました。広報もがみの歴史の中でも、この特集は特に印象的な広報紙として記憶されています。



る内容となっていました。社会教育、出稼ぎ、地域の暮らしなど、当時の町が抱えていた課題を広報の中で丁寧に取り上げている点も、この号の特徴の一つです。記事は読みやすく整理され、写真やレイアウトにも工夫が施されており、読者が内容を理解しやすい紙面構成となっていました。

このように、町の出来事を伝えるだけでなく、その背景にある社会や暮らしの姿まで掘り下げて伝えることで、町民の方々とともに考えるきっかけをつくる。こうした紙面づくりの考え方は、今後の広報もがみの編集にも取り入れるべき点であります。

なお、昭和49年12月号は、広報もがみが全国広報コンクールで初めて評価された記念すべき1号です。



そんなに賞をもらってたの？

山形県と全国広報コンクール、合わせて22回の受賞

受賞内訳

- 山形県広報コンクール 15回
- 全国広報コンクール 7回

広報もがみは、これまで山形県広報コンクール、全国広報コンクールを合わせて22回の受賞を重ねてきました。表紙写真や特集記事など、さまざまな部門で評価されてきたものです。町の出来事や地域の課題を丁寧に取材し、町民に分かりやすく伝える紙面づくりが、多くの評価につながってきました。



受賞が続いた黄金期

1994年から2004年までの約10年は、県や全国の広報コンクールで14回の受賞を記録しました。その時期は、町の課題や地域資源を掘り下げた特集記事が多く掲載された時期でもあります。

まさに、広報もがみの歴史の中でも町民に寄り添った情報発信が出来ていた「黄金期」といえるのではないのでしょうか。

広報もがみ 過去のコンクール受賞歴





暮らしのつながりを感じられる内容となっていました。

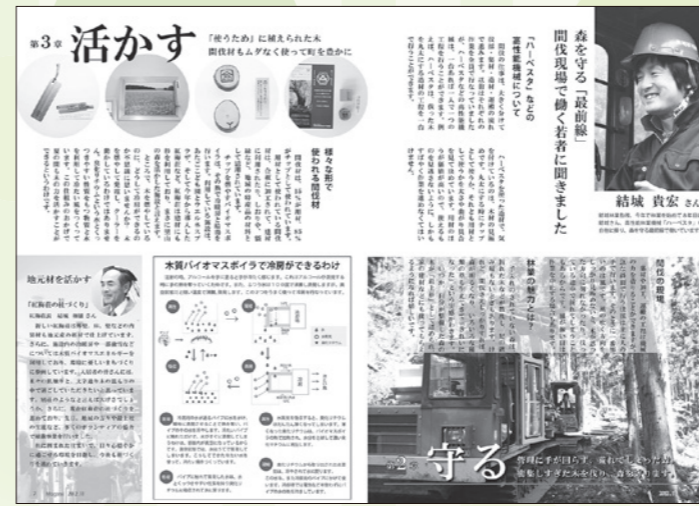
こうした地域資源をテーマにした特集は、平成後期の広報もがみの特徴の一つといえます。町の出来事を伝えるだけではなく、地域の産業や環境、将来のまちづくりについて考えるきっかけをつくる広報づくりが行われてきました。なお、この広報紙は、地域資源を活かしたまちづくりの取り組みを分かりやすく紹介した紙面として評価され、山形県広報コンクールで入選を果たしました。

広報もがみはこれまで、町の出来事や地域の課題を伝えながら紙面づくりを続けてきました。そして平成後期の広報は、地域資源やまちづくりの取り組みを町民に伝える媒体として、新たな役割も担うようになっていきます。

町の面積の約8割を占める森林資源に着目し、木質バイオマスエネルギーの取り組みを紹介した特集です。木質バイオマスとは、間伐材や林地残材などの木材をエネルギーとして活用する仕組みのことです。特集では、森林整備の必要性や木材チップの製造、ボイラーによる熱利用の仕組みなどを、写真や図解を交えながら分かりやすく紹介しました。

この取り組みは、森林を守ることと地域のエネルギー利用を結びつけるものであり、町の産業や環境にも関わる新しい試みとして注目されていました。広報では、その背景や仕組みを丁寧に解説しながら、地域資源を活かしたまちづくりの取り組みを紹介しています。

また、紙面では行政の取り組みだけでなく、林業に関わる人々や地域、現場の様子なども紹介されており、町の森林と



の最上町は、人口がおよそ1万3千人。スキーのオリンピック選手も数名輩出するなど、町全体に活気があった時代でした。

とにかく明るい話題を届けたい

広報づくりで特に意識していたのが「明るい話題を届けること」でした。

「当時はインターネットもなく、町民の方々へ情報を届ける手段は広報紙が中心でした。だからこそ、町の人が元気になるような話題や、地域の課題を共有できる記事を届けたいという思いで紙面づくりをしていました」と語ります。

担当して3か月目に作成した昭和52年7月号は、笠原さんにとって、特に思い出に残る広報紙です。

「最上町総合計画をテーマにした紙面でした。自分自身が内容を理解して記事を書く

一瞬の笑顔を書した表紙写真

昭和52年10月号の表紙写真は、山形県広報コンクール写真の部で入選しました。敬老会の日、中央公民館で表紙写真を探していたとき、後ろから聞こえた笑い声に振り返り、とっさに撮影した一枚でした。

「後から同じような写真を撮ろうとしても、なかなか同じ雰囲気にはなりません。あの瞬間に出会えたことが、とても印象に残っています。写真を撮るときは、とにかくいい笑顔を書きたいと思っていました」と振り返ります。

また、「編集担当として特にやりがいを感じていた企画が最上の若い人でした」と語る笠原さん。町の若者を紹介するこのコーナーは読者からの反響も多く、笠原さん自身も楽しみにしていた企画だったといま



昭和52年4月から7年間編集を担当  
元広報担当 笠原啓一さん（向町）



山形県広報コンクールの写真の部で入選した表紙。敬老会で久しぶりの再会に喜び合う様子。

広報もがみは、これからも町の歩みを伝えていきます。900号の向こうにも、町の物語は続いています。

つないできた広報のかたち  
広報は、まちづくりのシンボル。

広報もがみは、時代ごとの出来事や地域の課題を伝えながら発行を重ねてきました。その紙面には、その時代の町の姿だけでなく、広報づくりに携わってきた人たちの思いや工夫も刻まれています。

取材を重ね、写真を撮り、記事を書き、一つの広報を作り上げてきた先輩たちの積み重ねが、現在の広報もがみへとつながっています。

ここからは、かつて広報編集を担当し、広報コンクールでも評価された紙面づくりに携わった笠原啓一さんに、当時の広報づくりについて話を伺いました。

手作業で作った広報紙

昭和50年に役場へ入庁し、昭和52年から58年までの7年間、広報もがみの編集を担当した笠原啓一さん。当時は現在のようなデジタル環境はなく、広報づくりはすべて手作業で行われていました。「広報の取材や編集は17時まで行い、その後は電算業務を担当していました。帰るのは深夜になることも多く、今振り返るとなかなか大変でしたが楽しい毎日でした」と当時を振り返ります。

原稿はすべて手書きで作成され、文字数や行数の制限に合わせて細かい修正を繰り返しながら紙面を整えていきました。校正が入るたびに文章を調整し、最終的には印刷会社で活版印刷を行うという工程でした。

笠原さんが広報を担当していた頃（へ）

900号の先へ向けて

笠原さんにとって広報とは、町を知り、人と出会い、学ぶことができる仕事でした。「広報は自分自身の勉強の場でもありました。町のことを知り、町の人とその思いを共有できる、とてもいい仕事だったと思います。広報はまちづくりのシンボルではないでしょうか」と語ります。

そして、900号を迎えた広報もがみへ、次のようなメッセージを寄せてくれました。「これからも広報もがみを通してまちづくりを進めていく精神を大切にしていきたいです。900号のその先へ向けて、歴史を積み重ねながら、広報紙を通して、これからの未来を町民の方とどんどん語ってほしいと思います。」

アンケートからみえてきたこと②

暮らしを支える安心情報への期待

福祉・健康・医療、子育て・教育といった分野にも3割を超える関心が集まりました。これは、町の将来に関する情報だけでなく、日々の暮らしに直結する制度や支援策への関心が高いことを示しています。どのような支援があるのか、どこへ相談すればいいのか、どのような手続きが必要なのかといった情報は、生活を支えるうえで大切なものです。広報もがみでは、町の未来を伝える情報とあわせて、暮らしに役立つ制度や支援内容についても、分かりやすく整理しながら丁寧に伝えていくことが重要であることが分かりました。



分野	割合
1 写真を多く使った紙面	72.1%
2 実用情報	37.2%
2 短くまとめたコンパクトな記事	37.2%
3 イラストや図解中心	34.9%

その他、シリーズで連載する方法 27.1%、読み物（インタビュー記事） 16.3%、ポップなデザインの特集 16.3%なども選ばれていました。

アンケートからみえてきたこと③

「分かりやすさ」への強い要望

アンケートでは、「写真を多く使った紙面」が72.1%と最も多く、視覚的に分かりやすい広報を求める声が多かったです。また、短くまとめた記事やQ&A形式、図解やイラストを使った説明など、内容を整理して分かりやすく伝えてほしいという意見も多く寄せられました。

多くの情報をただ掲載するのではなく、重要なポイントを整理し、直感的に理解できる紙面づくりが求められています。今後の広報もがみでは、写真や図解を効果的に活用しながら、読みやすく分かりやすい紙面づくりを進めていくことが重要であると考えられます。

アンケートからみえてきたこと④

人物紹介と行政の透明性

自由記述では、「若い起業家を紹介してほしい」「学校の活動をもっと知りたい」といった、町で活躍する人や地域の取り組みを紹介してほしいという声が多く寄せられました。

また、「予算や施策の効果を分かりやすく説明してほしい」「相談窓口を明確にしてほしい」といった意見もあり、行政の取り組みをより身近に感じたいという思いもうかがえます。

これらの声から、広報もがみには情報を伝えるだけでなく、人の活動や行政の取り組みを丁寧に紹介し、町の姿を分かりやすく伝える役割が求められていることが分かりました。



今回実施したアンケートからは、町民が広報もがみに対してさまざまな期待を寄せていることが分かりました。町の産業や観光、まちづくりといった将来に関わる情報への関心が高い一方で、福祉や健康、子育てなど日々の暮らしに直結する情報についても多くの関心が寄せられました。

また、写真や図解を多く使った分かりやすい紙面構成を望む声や、行政の取り組みや制度をより丁寧に説明してほしいという意見も見られました。さらに、町で活躍する人や地域の活動を紹介してほしいといった声からは、町の魅力や人のつながりを感じられる広報への期待もうかがえます。

今回寄せられた意見は、広報もがみが今後どのような役割を果たしていくべきかを示す大切な指針となりました。これらの声を踏まえ、広報もがみは町民にとってより身近で分かりやすく、町の今と未来を共有できる媒体として、さらに内容の充実を図っていく必要があります。

次のページでは、今回のアンケート結果を踏まえた今後の広報もがみの方針について紹介いたします。

町民の声を  
これからの広報へ

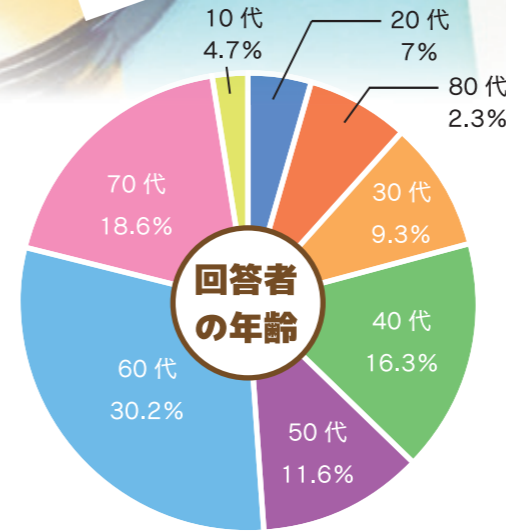
町民の声から見えた  
広報のこれから

アンケート



第900号を迎えるにあたり実施した読者アンケート。日々の暮らしの中で広報もがみを読んでいる町民の率直な声が集まりました。今回のアンケートは、単に「読みやすさ」や「好きな特集」を伺うものではなく、広報もがみがこれからのような役割を果たしていくべきか、その方向性を町民とともに考えるための重要な調査でした。

その結果から見えてきたのは、「未来」と「安心」の両方を求める町民の方々の貴重なご意見でした。



アンケートにご協力いただきました皆様へ

このたびは「広報もがみ特集に関するアンケート」にご協力いただき、誠にありがとうございました。お寄せいただいたご意見やご感想は、今後の「広報もがみ」の内容充実など、よりよい広報づくりのために活用させていただきます。なお、プレゼントの当選発表は発送をもってかえさせていただきます。今後とも「広報もがみ」をよろしく願いたします。



アンケートからみえてきたこと①

もっと町のこと知りたいという声

最も関心が高かった分野は「商工・観光」(55.8%)、次いで「まちづくり」(48.8%)でした。これは、地域経済の動向や観光振興、人口減少対策など、町の将来像に対する関心の高さを示しています。単なるイベント紹介ではなく、「町の産業は今どうなっているのか」や「若い世代の働く場はあるのか」、「町はどのような方向に進もうとしているのか」といった、より本質的な情報が求められています。

分野	割合
1 商工・観光	55.8%
2 まちづくり	48.8%
3 福祉	34.9%
3 健康・医療	34.9%
子育て・教育	32.6%
農林業	30.2%

# 変わる広報紙 今後の5つの方針

## 特集記事を定期的に企画

01		商工観光
02		農林振興
03		子育て・教育
04		健康・福祉

アンケート結果で要望の多かった商工観光、農林振興、子育て・教育、健康・福祉の4分野を柱とし、重点テーマ特集を実施します。特集では、課題の背景、取り組みの内容、現場の声、成果や今後の展望まで踏み込んで紹介します。また、内容は単なる報告ではなく、町の方向性を共有する紙面へ進化させます。

## 視覚的に伝わる紙面づくり

- ・写真のサイズや点数増加
- ・図解やイラストをより多く活用
- ・文章の簡潔化
- ・囲み記事で要点整理



写真や図解をこれまで以上に効果的に活用し、視覚的に内容が伝わる紙面づくりを進めます。文章は必要な情報を精査したうえで要点を整理し、簡潔で読みやすい構成に整えます。重要なポイントは囲み記事や強調表示を用いて分かりやすく示し、手続きや制度の流れについては図解やフローチャートで説明します。また、見出しや小見出しを工夫することで、読みたい情報にすくたどり着ける紙面を目指します。読者の負担を軽減しながら、内容をしっかり理解できる広報へと改善していきます。

## 70年の歩みの先にあるもの

昭和29年の創刊以来、広報もがみは70年にわたり町の歩みを記録し続けてきました。町の誕生、産業の発展、災害からの復旧、学校や地域行事の様子、その一つ一つが紙面に刻まれ、今日に至ります。時代が移り変わる中で、紙面の構成や表現方法は変化してきました。しかし、「町民に正確な情報を届ける」という基本姿勢は、創刊当初から変わることなく受け継がれてきました。活字中心の紙面からカラー写真を多用した構成へと進化しながらも、広報もがみは常に町と町民をつなぐ役割を担ってきました。

## 町民の声が示したこれからの広報

今回実施した読者アンケートでは、町の未来や産業振興への関心が高いことが明らかになりました。同時に、福祉や健康、子育てなど、日々の暮らしに直結する情報を分かりやすく伝えてほしいという声も多く寄せられました。さらに、予算や施策の効果を丁寧に説明してほしい、相談窓口を明確にしてほしいといった具体的な意見も見られました。そこに共通しているのは、「もっと知りたい」「もっと理解したい」という前向きな姿勢です。

# 未来を描く広報

伝えるだけでは終わらない  
理解し、共に考え、

## 人が主役の広報

- ・地域で活躍する町民や若手事業者の紹介
- ・移住者の声
- ・学校での活動をシリーズ化

町の魅力は「人」にあります。地域で挑戦する人、学校で学ぶ子どもたち、地域を支える高齢世代。制度の説明に加え、そこに携わる人の姿を伝えることで、共感を生む紙面を目指します。



## 行政の見える化

- ・予算の使い道を図解
- ・事業効果の検証記事
- ・相談窓口の明確化



予算や施策の背景、成果や検証状況を分かりやすく紹介します。また、相談窓口や担当部署を明確にし、「どこに聞けばよいか」が一目で分かる紙面構成を目指します。

## 町の記憶を未来へつなぐ

### 過去の出来事や表紙を振り返る企画

町の歴史を共有することは、未来を考える土台になります。900号は、これまでの歩みを受け継ぎながら、次の100号へ向かう新たな出発点です。今後は、数十年前のその月の表紙や、その時期に町ではどんな出来事があったのかなどを定期的に紹介していきます。



広報もがみは、単なるお知らせの媒体ではなく、町の現状と未来を共有するための媒体として期待されています。町民が町の課題や取り組みを理解し、自らの生活や地域の将来と結びつけて考えることができる紙面づくりが求められています。町では、この声を真摯に受け止め、より分かりやすさを追求し、丁寧な説明と視覚的な工夫を重ねることで、理解を深める広報へと進化させていきます。

## 次の100号へ向けて

900号は、過去を振り返るだけの記念号としてだけではなく、これまでの歴史を礎としながら、これからの広報の姿を示す転換点です。町の未来を描く特集、暮らしを支える情報の充実、人物や地域活動の紹介、そして行政の見える化。これらを一一つ積み重ねていくことで、信頼される広報を築いていきます。

情報があふれる時代において、紙の広報紙が持つ意味は決して小さくありません。確かな情報を整理し、誤りなく伝え、町の方向性を共有する媒体としての役割は、今後も変わることなくあります。

広報もがみは今後も町民の皆様と共に歩み続けます。町の歴史を記録し、町の現在を映し、町の未来を描く。その使命を胸に、これからも一号一号を丁寧に積み重ねてまいります。

― 特集 完 ―